

グローバル人材の育成を見据えた 日本人学生と外国人留学生の混在型による初年次交流学習のデザイン Exploring a New Curriculum to Nurture Global Leaders: First Year Collaborative Learning for Japanese and Foreign Students

岩 崎 千 晶
池 田 佳 子

キーワード

交流学習, 外国人留学生, 共修, グローバル人材, 初年次教育, アクティブ・ラーニング

1. はじめに

経済的な規制緩和, 国をまたいだグローバルな課題解決の必要性, 多国籍企業の活躍等によりグローバル社会が進展している(友松 2012, 徳永 2011). グローバル社会では, 主体的に物事を考え, 多様なバックグラウンドを持つ他者に対して, 自分の考えを分かりやすく伝えたり, 文化的な背景における価値観の差異を超えたりして, 相互作用的で新しい価値を生み出す人材が求められている(産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会 2010). そのため, 外国語運用能力をはじめとした, コミュニケーションスキル, チームワーク, プレゼンテーション能力, 異文化理解力等を保有する人材を育成する必要があると掲げられている(友松 2012, 河合塾 2011).

大学はこのような力を保有するグローバル人材を育成するために様々な教育実践に取り組んでいる. たとえば近畿大学や岡山大学はイングリッシュ・カフェを展開し, 日本人学生が日常的に外国人留学生と交流できる学習環境を構築している(宇塚 2013, 北爪 2013). 正課の授業実践では, 内丸(2013)が, 外国人留学生向けの日本語の授業において, 日本語を専攻する日本人学生が参加する協同学習を実施している. その結果, 互いの文化への理解深化が行われたとの効果を明示し, 外国人留学生と日本人学生の合同授業を展開することの効

果と意義を示している. このように, 日本人学生と外国人留学生が共に学びあうプロセスで, 学生らが互いの共通点と違いを認識して, 新しい自己を発見し自己成長へとつながる学習を「共修」という. 東北大学では, 全学共通科目に日本人学生と外国人留学生が共修できる授業科目として「国際共修ゼミ」を設定し, 正課内においてグローバル人材を育む環境を整備しつつある(佐藤 2011). この授業では, 日本人学生が外国人留学生と意見交換をしながら, 日本の社会で働くために必要な敬語を中心とした日本語表現, プレゼンテーションの方法を学ぶとともに, 日本と諸外国におけるコミュニケーションの違いについて検討している.

外国人留学生との共修を取り入れた授業, グローバル人材の育成を育むことを目的とした授業は, 学習者が能動的に学ぶアクティブ・ラーニング型の授業で進められていることが多い. グローバル人材に求められているコミュニケーションスキル, 異文化理解力等を育成するには教授者による理論を主軸とした情報伝達の教育よりも, 学習者の経験や能動的な参加によって学習を進めることが有益だとされているからである(加藤 2009).

しかし, 大学で展開しているグローバル人材育成のための教育実践は, まだ緒に就いた段階であり, こうした授業デザインの共有がまだ十分に実施されていない. 今後は, 大学が有益な

教育実践を共有していくことで、より有効な教育の手立てを見出す必要がある。そこで本稿では、日本人学生と外国人留学生が能動的に授業に参加し、交流するアクティブ・ラーニング型の授業をデザインした。この実践を評価することで、外国人留学生との混在型による初年次交流学习がもたらす効果と課題を提示する。

2. 実践の概要

2.1 関西大学における教育改革への取り組み

2.1.1 教育 GP「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」の取り組み

本稿で取り上げた日本人学生と外国人留学生との合同授業は、これまでに関西大学国際部が展開している教育改革、ならびに関西大学教育推進部が2009年に採択された大学教育推進プログラム（教育 GP）「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」の成果が土台となっている（関西大学2012）。教育 GP では、初年次教育に焦点をあて、アクティブ・ラーニング型の授業として「スタディスキルゼミ」を開講し、教育方法の改善を推進する取り組みを行った。授業には、学生の学びを支援する学生スタッフとして LA（ラーニング・アシスタント）を導入した。LA は、初年次の学生がグループワークに取り組む際に、ファシリテータ、あるいは学習モデルとしての役割を担い、学生が円滑にグループで活動できるようきめ細やかな支援をすることを目指している。本授業においても LA4 名を配置し、学生の活動を支援した。

2.1.2 グローバル人材の育成に向けた取り組み

関西大学におけるグローバル人材の育成に向けた取り組みとしては、短期長期の留学プログラムに加え、デュアルディグリープログラムを実施し、ウェブスター大学と関西大学からの学位が取得できる教育実践を行っている。また、日常的にも外国語や外国文化に触れ合う機会として、外国人留学生との交流イベントや外国人留学生が外国語の講師役となった会話交流

会を展開している。

正課では、外国人留学生や海外の大学との交流を取り入れた授業実践を試行的にすすめてつあるが、まだ全学的に普及しているとは言えない現状である。しかし今後グローバル人材を全学的に育むためには、外国人留学生や海外と交流する機会を増やし、自国の文化と他国の文化についての共通点や差異点などの新たな気付きを発見し、国際的視野を培うことが求められる。そこで本取組では、日本人学生と外国人留学生の両者が、日本語・英語の両言語を無理のない程度に活用する交流学习をデザインした。

2.2 授業科目と授業計画

本稿では「スタディスキルゼミ（課題探求）（受講生 23 名）」と「コンテンポラリー・ジャパン（日本を調べる）（受講生 18 名）」による合同授業を対象とする。スタディスキルゼミは、全学共通科目の初年次演習であり、プレゼンテーション、調査活動、ディスカッションなど大学生に求められるアカデミックスキルを培うことを目的とした授業である。とりわけ「スタディスキルゼミ（課題探求）」では、課題を発見し、調査活動を経てプレゼンテーションを行うことに重きを置いている。「コンテンポラリー・ジャパン」は、外国人留学生対象科目で、日本における社会的・文化的な課題を取り上げ、解決策を検討し、その結果についてプレゼンテーションを行う。両科目で日本人学生、外国人留学生による混在型の授業を展開した理由としては、授業内容に共通性が高かったことに加え、「スタディスキルゼミ」は、国際をテーマとした課題探究をするため、外国人留学生と関わる機会が有効であると考えた。「コンテンポラリー・ジャパン」では、課題について調査する際に、日本人と協同して活動に取り組むことで日本に対する理解が深まると判断したからである。

授業内容を表 1 に示す。授業では、日本人学

生と外国人留学生各 2～3 名から構成される 4～5 名のグループをつくり、プレゼンテーションを 2 回行う。第 1 回～9 回までの授業では、異なる文化背景を持つ学生が協力し合って調査や発表できるように、ハワイ大学と交流学习を取り入れた。ハワイ大学との交流のテーマは「クラブ活動」「キャンパスライフ」「大学の授業」「大学の施設」等であり、日本とハワイにおける大学の現状と比較できるようにした。学生はテーマに応じて関西大学の現状を調べるとともに、ハワイ大学の現状を尋ねるアンケートを英語で作成し、調査結果を分析した。その後学生は、外国人留学生や TA の協力を得て、調査結果をスライドにまとめ、読み原稿を作成し、英語でプレゼンテーションを行った。学生は、このプレゼンテーションの映像をハワイ大学へ送り、ハワイ大学の学生からはコメントが寄せられた。

第 10～13 回の授業で実施した第二回プレゼンテーションでは、第一回で取り上げた「大学の施設」や「大学の授業」に関するプレゼンテーションを深め、「関西大学への提言」として論証型のプレゼンテーションを日本語で行った。優秀なグループは、関西大学国際部の主催する外国人留学生プレゼンテーションコンテストに参加した。

表1 授業内容

授業回	授業内容
第 1 回	オリエンテーション, ハワイ大学の紹介
第 2 回	自己紹介ビデオの制作準備, 授業で利用するシステム・ソフト紹介
第 3 回	自己紹介ビデオの制作
第 4 回	ハワイ大学へのグループ紹介, ビデオ URL を manaba に投稿
第 5 回	ハワイ大学からのコメント確認 第一回プレゼンのテーマ決定
第 6 回	第一回プレゼン準備: ハワイ大学へのアンケート調査, フィールド調査
第 7 回	第一回プレゼン準備
第 8 回	第一回プレゼン準備
第 9 回	第一回プレゼン
第 10 回	第二回プレゼンの準備
第 11 回	第二回プレゼンの準備
第 12 回	第二回プレゼン
第 13 回	プレゼンテーション大会参加
第 14 回	授業のふりかえり, レポート執筆
第 15 回	授業のふりかえり, レポート執筆

2.3 思考の可視化を促し、学びの質を高める ICT の活用

本授業では、ハワイ大学との交流を行うため、ならびにグループ活動を円滑に進めるために、授業に ICT を活用した。アクティブ・ラーニングでは、思考の変容を把握したり、メタ的に認知したりすることが重要であるが、そのためには思考を可視化することが必要になる(岩崎 2014a)。思考を可視化することで、他者の意見との相対化が可能となり、思考の変容を意識できるからである。この可視化を促し、他者の視点を強化するツールとしては、ICT が有益となる(溝上 2007)。

そこで本授業では、ICT を活用した授業を実践した。第 1 回プレゼンテーションでは、iPad を使いハワイに送る自己紹介ビデオを作成した(図 2)。



図 2 ハワイ大学向けの紹介ビデオ

また、グループでのやりとりや活動の記録、ハワイ大学の学生との交流には、manaba を利用した(図 3)。manaba にはグループごとにコミュニティを作成した。

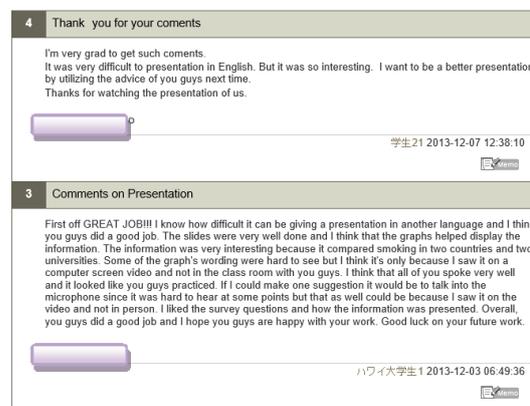


図 3 manaba での意見交換

学生はコミュニティを使ってアンケート調査を実施し、意見交換を行った。プレゼンテーションを作り上げるプロセスにおけるデータのやり取り、意見交換、学生の活動ふりかえりについても manaba が利用された。学生は授業外にも意見交換をして、作成途中のスライドを manaba に提示し、グループでスライドを作成していた。最終的に、学生はプレゼンテーションを録画し manaba に提示した。ハワイ大学からはプレゼンテーションへのフィードバックが manaba のコミュニティに寄せられ、学生にとって活動をふりかえる機会となっていた。

2.4 学生の学びを支える学習支援

アクティブ・ラーニングでは、自律的に学ぶことが重視されているが（溝上 2007）、そのためには、学生が自律的に学べるように学習支援を行うことも必要になる。本授業では日本人学生と外国人留学生のグループに対してきめ細かな支援を行うため、TA (Teaching Assistant) 2 名と LA (Learning Assistant) 4 名を導入した。TA は外国語運用能力に長けた大学院生で、グループワークに関するファシリテーションに加え、受講生が英語でプレゼンテーションを実施する際の外国語運用に関する支援にも携わった。

LA はグループワークのファシリテーション技術の訓練を積んだ学部生で、各グループにおけるファシリテーションに取り組んだ。TA が全体のファシリテーション、外国語面でサポートをし、各グループでの話し合いに関しては LA がサポートをするよう役割分担をすることで、学生が自律的に学べるような支援を行った。また、2013 年に開設された「コラボレーション・コモンズ」を活用して（岩崎 2014b）、授業外にも学習をすすめるように促した。

3. 研究の方法

本研究では、日本人学生を対象に授業前後に

アンケート調査（有効回答数：事前 18 名、事後 20 名）を実施し、平均値の事前事後を示した。質問項目は、異文化感受性発達尺度（山本 2002）、異文化対処力（山岸 1995）を参考に「①異文化環境下で仕事や勉学の目的を達成できる（項目 1-2）」「②文化的・言語的背景の異なる人々と好ましい関係を持つことができる（項目 3-6）」「③ストレスに対処し、個人にとって意味のある生活を送ることができる心理的適応能力（項目 7-9）」「④状況調整力（項目 10-14）」というグローバル人材に求められる資質を中心に質問を提示した。質問項目は 27 問あったが、本調査に関連する項目を提示する。

また日本人学生（4 名）と外国人留学生（4 名）に対して授業後にインタビュー調査を 40 分から 1 時間程度実施した。インタビューでは合同授業を経験して、「よかった点、課題、TA・LA の支援」について尋ねた。インタビュー結果はアンケート分析の際に相補的に活用するとともに、TA・LA の活動について分析する際に用いた。

4. 結果と考察

4.1. アンケートの結果と考察

アンケートの結果を表 2 に示す。「①異文化環境下で仕事や勉学の目的を達成できる（項目 1-2）」では、日本人学生が「他の文化背景を持つ他者と学習すること（項目 1）」に対してはもともと意識が高いことが分かった。また「意見が異なる時、相手に合わせず納得するまで意見を交わすことが得意だ（項目 2）」と考える日本人学生は、授業後そう思う傾向が平均値より多少高くなっていた。日本人学生は外国人留学生と 1 つのプレゼンテーションを協同的に作り上げる過程で、納得するまで他者と話し合えたとの実感があつたのではないかと考えられる。

「②文化的・言語的背景の異なる人々と好ましい関係を持つことができる（項目 3-6）」で

は、どの項目も事後平均が上がっていた。項目 3, 4 に関しては、様々な文化背景を持つ外国人留学生やハワイ大学の学生と共に、大学に関連するいくつかのテーマについて、各国の事例を基に利点と課題を抽出し、その解決策を検討していった経験が役立っていることが考えられる。例えば、授業についてプレゼンテーションをしたグループは、台湾出身の学生が台湾の大学では、シラバス検索の際に教室の場所提示やナンバリング制度が導入されていることを示し、関西大学にもこれらの制度を取り入れる必要性について述べていた。大学の施設について取り組んでいたグループは、食堂を取り上げ、外国人留学生の出身国の大学を例示し、関西大学にも外国人留学生向けのメニューを充実させることを提案していた。また、こうした過程を経て、「国際問題との関連性」や「それを学ぶ理由を思いつく」という項目 5, 6 が向上していたのではないかと考える。

③「ストレスに対処し、個人にとって意味のある生活を送ることができる心理的適応能力（項目 7-9）」に関しては、全項目で平均値が下がっていた。ほとんどの日本人学生は外国人留学生と協同して活動する機会をこれまで十分に持っておらず（留学経験のある学生 2 名を除く）、「外国語を話すグループと一緒に活動をして自分もうまくやっていると（項目 7）」と考えていたが、実際に活動してみると、思いどおりにいかない点もあり、評価が下がったと考えられる。インタビュー調査では、外国人留学生と日本人学生が manaba や LINE を活用して授業外に活動をしていたが、役割分担した活動に対して「約束の期日を守らなかったこと」や、「返事が遅い」というやり取りのすれ違いが起っていた。両学生らはこのやり取りに関して不快感を抱いていたが、メンバーに伝えることはせず、葛藤を抱えていたままでいたことが分かった。

また「海外旅行や異文化の学生とルームメイトとして暮らす（項目 8, 9）」に関しても、平均値が下がっていた。日本人学生は、外国人留

学生と実際に交流するまでは自信を持っていたが、外国人留学生との学習を通じて、外国人留学生の生活について知る機会を得たことで、自分が海外や異文化の学生と共に暮らせるのに関しても現実的に考えるようになったことが伺える。こうした悟りは、留学準備において重要な事柄であり、現実を知るための機会につながったといえる。

④「状況調整力（項目 10-14）」に関しては、項目 14 を除くすべての項目で平均値が上がっていた。日本人学生はグループでリーダーになろうと考え（項目 10, 11）、メンバーの中から反対意見が出た際になぜそう考えるのかという意見の背景をとらえようとし（項目 12）、自分の意見をしっかりと伝えようと努力している様子が見受けられた（項目 13）。一方で、項目 14 に関しては、「チーム内のメンバーが親しい友人でなくとも協力して活動ができる」と日本人学生は考えていたが、外国人留学生と実際に活動することで授業外のやり取りなど十分に協力できなかったことを実感し、平均値が下がったのではないかと考える。

表2 アンケート結果

質問項目	事前平均 (SD)	事後平均 (SD)
1 他の文化の背景を持つ者と一緒に勉強することはとても重要だと思う	4.61 (0.59)	4.61 (0.80)
2 意見が異なる時、あえて相手に合わせず、納得するまで意見を交わすことが得意だ	3.27 (0.98)	3.50 (0.74)
3 世界の様々な問題は、私の文化に解決策を求められる（参考にできる）と思う	3.22 (0.78)	3.50 (0.67)
4 他の国々で何が今起きているのか、を普段から意識してニュースを見たりしている	3.11 (1.04)	3.15 (0.91)
5 国際問題は、自分ととても関係があると思っている	3.22 (0.97)	3.45 (1.02)
6 他の文化についてもっとよく学ぶべき理由がすぐに思いつく	3.50 (0.83)	4.05 (0.80)
7 自分が分からない外国語を話すグループと一緒に行動しても、ストレスをあまり感じない方だ	3.83 (0.89)	3.50 (0.97)
8 海外へ一人で旅行することができると思う	3.22 (1.22)	2.90 (0.94)
9 異なる文化出身のルームメイトと一緒に生活することができる自信がある	3.50 (1.06)	3.30 (1.00)

10 グループ（3人以上）で活動すると、自然とリーダーシップを取る役割になることが多い	2.88 (0.87)	3.05 (0.80)
11 チームの中で日本人が自分だけで、他のメンバーが留学生だと、リーダーにならないといけないと思う	2.94 (1.02)	3.10 (0.99)
12 グループの中で、反対意見が出てきたとき、なぜその意見が出てきたのか、まず考える	3.27 (0.93)	3.90 (0.70)
13 自分が正しいと思えば、皆と意見が異なってもしっかりと意見を述べて反論できる	3.22 (0.91)	3.50 (0.86)
14 チーム内のメンバーが、親しい友達でなくても、協力して活動することができる	4.22 (0.41)	3.85 (0.85)

4.2. TA・LAに関するインタビュー結果と考察

TA・LAに関しては、英語でのプレゼンテーション資料の作成やプレゼンテーションの構成を検討する際にアドバイスがなされる等の効果がインタビュー結果から明示された。例えば日本人学生から「第二回のプロジェクトは、提案をするプレゼンテーションでした。ずっと意見が出てこなくて、アイデアが出てこなくて、LAさんが来て、防災についての問題点をいくつかくれた」との意見が寄せられた。学生はLAが新たな視点を提供したことで、活動が進んだとし、学生スタッフを導入した効果が見受けられた。また、「英語の時はどうやって訳したらいいですかねと聞いていたんですけど、TAさんに自分のスライドを見せてもらって、こういうのをつくって見たらとか、教えてもらいました。」との意見が寄せられた。日本人学生はTAから英語訳について助言をもらい、TAが作成したスライドを見て、どのようなスライドを作成するのが望ましいのかについてイメージを掴んでいた。学生が自律的に学んでいこうとする際の支援としてTAやLAの活動が貢献していたといえる。

5. 今後の展望と課題

日本人学生と外国人留学生との混在型による交流学习を実施した結果、職務の達成、異なる文化背景の人々との関係性構築、状況調整能

力に関しては効果の傾向が見受けられたが、ストレスへの対応に関しては十分な効果が見受けられなかった。しかし、実際に外国人留学生と交流することで、うまくいかないこともあるという課題や葛藤を感じ、他の文化背景をもつ学生と交流するには努力が必要だということを感じた経験を得たともいえる。

今後は、こうした葛藤を乗り越えて達成感へと結び付ける授業を展開することも必要になる。グローバル人材に求められる力を育成するには2年次以降も連続性を持たせた授業をカリキュラム単位でデザインしていく必要がある。

参考文献

- 岩崎千晶（2014a）「学生の学びを育む学習環境を構築するために」第19回FDフォーラム大学コンソーシアム京都発表資料。
- 岩崎千晶（2014b）「大学生の学びを育む学習環境のデザイナー—新しいパラダイムが拓くアクティブ・ラーニングへの挑戦—」関西大学出版部。
- 関西大学「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」事業推進担当者会議（2012）「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開平成23年度成果報告書」関西大学
- 加藤 優子（2009）「異文化間能力を育む異文化トレーニングの研究：高等教育における異文化トレーニング実践の問題と改善に関する一考察」『仁愛大学研究紀要人間学部篇』8, 13-21.
- 河合塾教育研究部（2011）「大学におけるグローバル人材の育成に関するアンケート」。
- 北爪佐知子(2013)「近畿大学の学習支援：近畿大学英語村 E³[e-cube]」『IDE：現代の高等教育』556, 53-57.
- 溝上慎一（2007）「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」『名古屋高等教育研究』7, 269-287.

産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会（2010）「産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会報告書-産学官でグローバル人材の育成を-」
<http://www.meti.go.jp/press/20100423007/20100423007-3.pdf>

佐藤勢紀子, 末松和子, 曾根原理, 桐原健真, 上原聡, 福島悦子, 虫明美喜, 押谷祐子
(2011)「共通教育課程における「国際共修ゼミ」の開設：留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』 6, 143-156.

徳永保, 初井圭子 (2011)『グローバル人材育成のための大学評価指標—大学はグローバル展開企業の要請に応えられるか』協同出版.

友松篤信 (2012)『グローバルキャリア教育—グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版.

内丸裕佳子 (2013)「中級後半及び上級前半の学習者を対象とした地域文化・産業を学ぶ日本語教育の試み」『岡山大学教師教育開発センター紀要』 3, 117-124

宇塚万里子 (2013)「イングリッシュ・カフェ実践報告—4年間の軌跡とその成長についての考察」『大学教育研究紀要』9, 89-100.

山岸みどり (1995)「異文化間能力とその育成」, 渡辺文夫編著『異文化接触の心理学』, 川島書店, 209-223.

山本志都, 丹野大 (2002)「「異文化感受性発達尺度 (The Intercultural Development Inventory)」の日本人に対する適用性の検討：日本語版作成を視野に入れて」『青森公立大学紀要』 7(2), 24-4.

ならびに文部科学省科学研究補助金・若手研究 (B) (課題番号 24700917) を受け, その成果を公表するものである.

付記

本取組の一部は, 平成 25 年度関西大学教育研究高度化促進費において, 課題「グローバル人材育成を見据えた外国人留学生と日本人学生の「混合参加型学習モデル」構築の取組」,